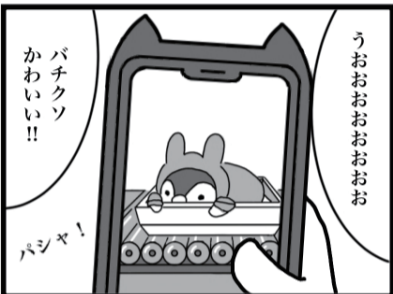
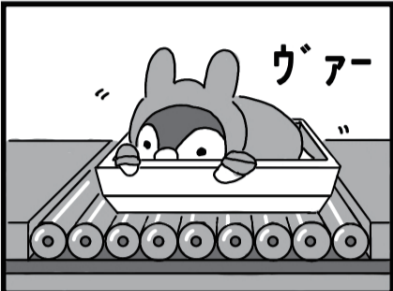


怒髪天を衝く

漫画：仁科夏瑚



文在寅大統領に会ってきた 〜「平山書房」訪問記〜

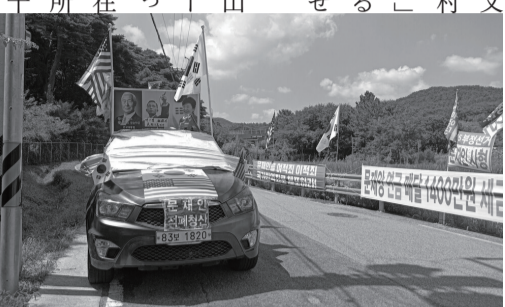
在任中、何かと物議を醸した韓国の大統領文在寅。現在は、韓国南部の山村に「平山書房（ピョンサンチュエッパン）」なる書店を開き、来店客と交流しているという。一般人でも会えるとなれば、ぜひ行ってみたい。

釜山から高速鉄道NEXで一駅、蔚山（ウルサン）駅で下車。ここからタクシイに乗る。運転手は、「平山書房」と言ってもピンと来なかったようだが、「文在寅」と言うとすぐに理解してくれた。所要時間は二十分ほど、料金は一万三千元程度である。

書店の前には、反文在寅の右翼活動家が陣取っていた。タクシイを降りて徒歩で見て行ってみると、いきなり「チャイナ？」と声をかけられた。ジャパンと答えると、とても嬉しそうな表情で「 코리아! ジャパン! フレンドシップ! 」と喜ばれた。

右翼といえば嫌韓一色の日本から見ると意外だが、韓国の右翼は、反共国家同士で連帯すべしという考え方のようである。もちろん他にも流派はあるかもしれないが、少なくともこの流派に関しては、政治体制のみに割り切った姿勢であり、政治思想としては本来あるべき姿といえるようにも思えた。

書店に入ると文氏がいた。来店客との記念撮影に応じている。渡航前、文氏がいつ来店するか分からず、念のために余裕をもってスケジュールを組んでいたが、あつげなく会えてしまった。50らしき人物は一人しかおらず、荷物検査などもない。記念撮影の待機列は時折途切れ、文氏はその度に店内を回って来店客と談笑している。あまりにも穏やかな



▲反文在寅派の右翼街宣、アメリカ旗が目につく



▲文在寅大統領とのツーショット(またいち)

光景に拍子抜けしてしまった。筆者も記念撮影の待機列に加わり、持参した文氏の著書にサインをもらおうとペンを取り出したところ、50から「サインはダメだ」と告げられた。順番が来ると、文氏は笑顔で握手して記念撮影に応じてくれた。その後、英語で少し会話を交わそうとしたが、文氏は全くといっていいほど英語を話せない。店の前にいた右翼活動家のほうが話せていたくらいである。

例えば、文政権と同時期に日本の政権を担った安倍元首相は英語が堪能であったし、今の岸田首相も、また韓国の現政権を担う尹大統領も同様である。それだけに、弁護士出身のインテリという印象も相俟って、文氏も英語が堪能であろうという先入観を、無意識のうちに抱いていた。しかし、文氏は元々貧しい生い立ちの市民運動家であり、苦勞の多い人生であったという。全くといっていいレベルで英語を話せないのは意外だったが、少なくとも堪能でないのはさもありなんといえよう。彼は、決してエリートではなく、むしろ韓国のありふれた

SF作家が聞く 異色のロシア文学入門

八月三日、名古屋・栄の書店・喫茶店兼イベントスペース「文喫 栄」にてトークイベント『ロシア文学の怪物たち』刊行記念 松下隆志×樋口恭介「ロシア文学とユートピア的想像力」が開催された。七月に『ロシア文学の怪物たち』を出版したロシア文学研究者の松下隆志氏に、名古屋在住のSF作家樋口恭介氏がロシア文学について聞く形でイベントが行われた。

ドストエフスキーやトルストイなどのロシア文学の古典とも言える作家から、ソローキンやプルーヴィンなどの現代の作家、また松下氏とロシア文学との出会いまで、樋口氏が松下氏に縦横無尽に質問を浴びせており、松下氏もこれに得意即妙に答えていた。また、ロシア文学に造詣が深いと思しき参加者からのコメントも時々ありながら、静かではあるものの不思議な熱量に包まれた異色のイベントとなった。

私自身恥ずかしながら、無謀にも『カラマーゾフの兄弟』を根性で読もうとして挫折する、という経験を繰り返して

た。アジョシ(おじさん)なのである。文氏が去った後、店員さんをお願いして帰りのタクシイを呼んでもらった。帰りのタクシイの運転手も、文氏と同じ匂いのする気さくなアジョシであった。しかし、口を開けば文氏への批判が止まらず、思想は全く異なっていた。

ここ慶尚道(キョンサンド)は、文氏の故郷であると同時に、開発独裁を進めた朴正熙(パク・チンヒ)元大統領の故郷でもある。特に、蔚山は重工業の発展で大いに恩恵を受けた都市であり、朴氏に真っ向から反するように見える文氏には、抵抗感のある人も多いだろう。

ただでさえ南北の厳しい分断があり、さらに国内でも社会の分断に直面する韓国。文氏の書店開店には、人々の融和を願う気持ちもあつたのではないかと。おそらく彼の人生最後となる大仕事は、まだ始まったばかりである。(またいち)

しておりロシア文学についてはほとんど門外漢だったが、イベントの中で樋口氏と松下氏がロシア文学の面白いポイントを手を変え品を変え紹介しており、ロシア文学への最初の窓口もなりうるような非常に参考になるイベントだった。また、ウクライナ侵攻以降更に日本との壁が出来てしまった印象があるロシアの社会や文化の雰囲気について知ることが出来る有意義なイベントとなった。

ロシア文学や社会は、大きく西欧派とスラブ派に分かれているという分類の仕方がわかりやすかったが、その中でもソローキンという人は異質な存在感を示しているのだと感じた。

イベントの中で、私も二人に「おすすめのロシア文学『最初の一冊』」を聞いてみたところ、ドストエフスキー『地下室の手記』が比較的短く、ネットの匿名の書き込みのような筆致であるため読みやすいという答えが返ってきた。また、イベントの中で言及されていたソローキンの『青い脂』も異常性が感じられて良さそうだと感じた。(マダロノサシミ)



▲樋口京介氏(左)に解説する松下隆志氏(右)

最前線

2024年9月号
2024年12月号
2025年3月号

取扱い店舗検索

マンゴー

Truth Social 日本人コミュニティは新規ユーザーを歓迎しています。
<https://truthsocial.com>

HUNTER HUNTER

38巻発売&連載再開記念

2024年9月15日(日) 17:00~22:00

チャージ1000円+ドリンク500円~

店長: 775リオ (@775ris)
副店長: ふぁくぐい (@fackgui)

イベントがエデン蒲田

状況

2024 Summer

炎上のための総合誌

ツイッターのレスバトルをひらく

広告募集

360×628

詳細は陰核派HPもしくはDMまで

陰核派機関紙 陰進

編集・事務 募集中!